

# 福島県現代俳句協会会報

第6号 2021年・春

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石疼  
福島市八木田神明十三の八 090(6220) 4757

## 令和3年度県現俳総会

### 四月十八日開催予定

#### コロナ情勢で書面議決も

令和3年度福島県現代俳句協会総会は、四月十八日(日)に、福島市のアオウゼ(MAX3階)にて開催することになりました。ワクチン接種も始まっている可能性はありますが、新型コロナウイルス情勢が不透明な中、昨年度のように「書面議決」で賛否をお願いすることも考えられます。いずれにしろ改めてご連絡いたします。

令和2年度は新型コロナウイルス禍により、予定していた総会・講演会を開催することが出来ませんでした。県会報の年4回の発行、郡山市安積の吟行句会の開催など、一定の成果を上げることが出来ました。

令和3年度の総会は、昨年予定していた記念講演との同時開催は予定していません。コロナ情勢により講師にご迷惑をおかけする可能性があるからです。議案は後日送付いたします。県現俳の運営や事業活動について、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしています。

## 「新型コロナウイルス」を詠むか

福島県現代俳句協会会長 春日 石疼

角川の『俳句』一月号の座談会「新時代、俳句はどうあるべきか。」の中で、片山由美子さんが「コロナやマスクの句は採っていません。」としたうえで、「マスクの句を採らないのは、季語としてのマスクの役目が終わったと思うから。」と述べている。季語は俳句のいのちという立場からすれば片山さんの言もわかるが、問題は表現する内容である。同じ座談会で鶴田智哉さんは「題として俳句を詠むのではなく、例えばウイルスを意識することで、ものの考え方、人との距離感が変わってくるわけです。」と語る。

同じような議論は十年前の東日本大震災・福島第一原発事故の際にもあった。「震災・原発」を「題

### 悼

佐藤弘子様が一月ご逝去されました  
謹んでご冥福をお祈りいたします

福島県現代俳句協会

として」詠むことの是非である。あの時『俳句』

誌は「励ましの一句」という特集を編んだ。何たる「上から目線」「他人事」かと思ったが、あれは当時の全国の人たちの「戸惑い」「不如意」の姿でもあったと思う。今回のコロナ禍は「当事者・傍観者」の「差」がないだけで、俳句を作る者の思いは当時と同じではないだろうか。「震災句」と括られてしまう句でも心を打つ句が多くあった。

戸惑いや言葉足らずや勇み足があったとしても、どんな「コロナ」を詠んでいいのではないか。私は震災句について「歴史に残る名作でなくてもいいではないか」「器にことばを盛れ。それを互いにぶつけ、鍛えていけばいいのだ。」と書く五十嵐進さんの言葉が忘れられない。『雪を耕す』より）  
近刊『泥天使』で照井翠さんは「コロナにて死ねば抱かるる柩ごと」と詠んでいる。震災で未だ行方がわからない人たちを思っている句だ。東日本大震災とコロナ禍、両方を詠み切実。私は感動して読んだ。要は思いの強さなのである。

### || 編集部より ||

今号より、とても頼りになる事務局次長の阿部多み子さんが編集部に参加してくれています。一層「福島県現代俳句協会」へご支援をいただくように、皆さんのご協力をお願いいたします。(K・S)

# 会員作品7句

## 復興へ一步

江井 芳朗 (南相馬「暖響」「海原」)

復興へ泡立草鋤く耕耘機  
煌煌と三日月浄ら稲穂垂る  
露霜を零し豌豆芽蒼し  
落栗のずぼり未帰還家屋荒る  
これでよき復興稲穂領ける  
復興の畑小松菜の苗移植  
津波禍の一村丸ごと冬灯無し (角部内村)

## 秋思

湯田 一秋 (会津若松)

教え子の出世話や柿の秋  
ぷりぷりと妻若くあれマスカット  
トラックのタイヤ回ます今年米  
無言館出れば昭和の秋の声  
秋夕焼城下に大事あるごとく  
玉入れも綱引もなし疫病の世  
ジャズ喫茶テーブル毎の秋思かな

## 帰り花

渡部 健 (千葉県「暖響」「藍生」)

寂しさの心ちらほら帰り花  
潮騒の如く落葉を掻いてをり  
オカリナの音色やさしき冬日向  
オカリナを翳せばはしやく冬落暉  
冬天をぐらりと揚がるアドバルーン  
天空を毀してしまふ鴨撃音  
一人言妻に聞かれし冬日向



## 冬たんぽぽ

植木 國夫 (福島「小熊座」)

秋の蝶二時四十六分の針  
大花野真中に除染袋坐す  
ひめむかしよもぎ除染夫の国訛り  
枯蔓引く村人のなき標葉郷  
廃屋につづく廃屋荻の声  
しわぶきをひとつ古里棄てる覚悟  
冬たんぽぽ入るを許さぬ津島小

## 家族時間

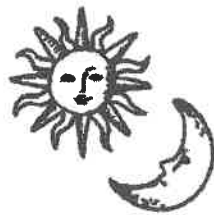
宇川 啓子 (福島「海原」)

コロナ禍のうねる地球や竹の花  
風潮に揺れる日々なり椋鳥の群  
箒雲さらりと流す聞き上手  
翳雲ちぎれたままの家族なり  
冬たんぽぽ迷子のように蹲る  
蠟梅咲く灯光あかりわずかで足る齡  
室林檎家族時間を蓄える

## 月

八島ジュン (福島「小熊座」)

月天心ランゲルハンス島に波  
今宵この月がひとつでない感じ  
靴に砂月夜に李さんと歩く  
靴下の片方は紺立待月  
らしさを問えば寒月に染みまたひとつ  
心臓の輪郭であり月である  
日本の定点として寒満月



# 県会員作品一句鑑賞

湖に入るまでは落葉の坂であり

永瀬十悟

《までは》という限定によってむしろ、《坂》が水底へ連続していることが強調される。

《坂》とは語源的・象徴的に境界のことだが（サカヒ）、この「越えられなさ」を《落葉》が可視化する。

《落葉》は《湖》の汀にはばまれ、人もはばまれる。汀（ミギハ）のキハもまた境界であり、ここでは二つの境界が垂直にあるいは平行に重なる。

語り手はこの二重の境界に魅了され、立ちすくんでいる。

『三日月湖』より。  
斎藤秀雄（鏡石町）

最後には燃やすつもりの日記買ふ

服部きみ子

未だ人様の鑑賞をする目も持たないわたしも、日記をはじめて丸一年になり掲句が目にと留まった。

このごろ「終活」という言葉を耳にする。言わば、ここの頃の整理だが、何人も何ひとつあの世には持つて行けない。振り返ればそんなことも。

それぞれに思いはあるうが、作者の潔さにユーモアと解放感を匂わす。そして最後を改めて考えさせる。

県会報第4号「会員作品七句」より

鶴川伸二（郡山市）

# 私を変えた一句

蝶墜ちて大音響の氷結期

富沢赤黄男

初出「旗艦」昭和十六年一月号。蝶が氷の上に墜ちる。「落ちる」ではなく「墜ちる」に不本意な蝶の死がうかがわれる。氷に墜ちた蝶は粉々になり大音響が起きる。あんな小さな蝶が墜ちたのに、だ。周囲は氷だらけの世界。蝶と氷結期の取り合わせが印象的な句である。

太古への思いや天変地異の予言と鑑賞される一方、昭和十年代の新興俳句の高まりや、昭和十五年の「京大俳句事件」などの時代背景を考えると、社会への批判を含んだ見立てにも取れる。

しかし、現代の私が惹かれたのは時代背景云々は関係ない。自分の迷いを払拭してくれた句として大切にしている。かつて俳句の虚の世界を描くのに逡巡していた時があった。そんな時期に出会ったこの句は私の背中を強く押してくれた。つい、易きに流れ口当たりの良い俳句を作ってしまうのだが、それでは新しい感覚は生まれえない。まずはゴツゴツしていても良いから自分の言いたいことを表現し、推敲を重ねていく。その姿勢を忘れそうになる時に、この句を心の中のプラカードに掲げることになっている。

田中雅秀（会津美里町）

朝顔につるべ取られてもらひ水 千代女

この句に出会ったのは、手塚治虫氏が無免許の天才医師の活躍を描いた作品「ブラック・ジャック」の「もらい水」という物語の中でした。

一コマめ、前置きのようにこの句が登場。

地方都市で医院を経営する男性と、そこに同居する老母の暮らしが描かれて行きます。その息子は老母の部屋まで病室にして、患者を入院させてしまいます。家を追われた老母は居場所を転々とする中、天災に巻き込まれ大怪我を負います。そこをブラック・ジャックが救出する……というもの。

加賀千代女が活躍した江戸期、観賞用として多くの品種が生み出された朝顔。しかし、ここに詠まれた朝顔は、日常身近に息吹いているノアサガオではないかと思えます。おそらく、毎日使っているつるべに、健気に巻きついた朝顔に心を留め、「もらい水」をする思いやりや優しさに、手塚氏も心を引かれたのではないのでしょうか。

物語中、老母が居場所を転々としていた理由を知ったブラック・ジャック。老母の命を救う手術代として、息子に一千万円を支払うように告げます。ところが息子は支払いを拒否。「私なら母親の値段は百億円つけたって安い。」というブラック・ジャックの言葉で締め括られます。

日々の暮らしや身の回りのことは、何気なく過ぎてしまいがち。しかし、そこにこそ大切なことや発見があるのではないかと教わった一句です。

鈴木亜由美（三春町）

私の好きな季語

# 「斑雪」 木幡 テイ

東北大震災の、津波禍の後片づけも進んでいない翌年の二月、山田神社の遷座祭があるというので半信半疑で出かけて行つた。

山田神社は、相馬市と南相馬市に跨がる八沢浦干拓地の総鎮守だったが、海沿いの通称「港集落」の四十戸とともに流出した。

干拓地のはずれは、海に面した大きな高台になつており、集落の憩いの場として、海からの避難場所としても指定されていた。しかし三方からの大波で四十七の命がここで消えた。すっからかんの高台に登ると、木の香の残る二基の鳥居、その奥に小ぶりの仮社殿が鎮座していた。

式の中でこの社殿は熊本県立球磨工業高校伝統建築科の過年度の卒業制作で、鳥居は今日の為に三年生が制作したものだと言明。震災直後から当地でボランティアをしていた熊本の一神官の働きかけで、大勢の熊本の人々の協力、尽力で、今日の運びとなった。校長先生、生徒たち、神社関係の方々が、たくさんさんの支援物資も一緒に運んできてくれたのだった。斑雪きらめく丘に、小さな仮社殿は存在感があつた。

後日「折るとは暁らぬことやはだれ雪」の句を作つた。鈍い私は、季節の変わり目の季語に触発され易い。

○斑雪嶺のあなたへ魂の途ひかる 宮坂静生  
○幾代織り山の斑雪に緋似る 宮津昭彦

## 新刊案内

### 田中雅秀句集『再来年の約束』

会津嶺は気高く

女とは古いテーマかも。雅秀さんの句集には、女の心の綾が散りばめられています。

会津に帰るといふ決断、想定外の原因事故、そして敬愛する師との訣れ、その渦中での強い意志が吐露されています。

大都会から、会津の風土に飛び込むのは並の苦労ではない。会津育ちの私にとって思い出深い故郷、未だ雪は好きになれない。

雅秀さんの決意に至るまでの迷い、そして励ましてくれた亡き師への心情には心が痛くなります。

桐の花本音はいつまでも言えず  
ブロッケン現象私の影に棘がある  
猪の去りたちまち迷子なりわれは

また、原発事故で避難した生徒との関わり。優しい人柄でほっとします。

鳶尾や明日を選ぶという勇氣  
雪虫の話を取説の少女とす  
そして、現在の心境でしようか。

五千尺の山に向かつてシート干す  
受け継がれゆくこころざし赤のまま  
白鳥の声する真夜のココアかな

幸いあれと私も祈ります。新春の贈り物、多くを学ばせていただきました。感謝いたします。  
(丹羽 裕子)

前号会報より

この句がよかった!

久保 羯 鼓

広島忌白昼へ空剥けてゆく 鈴木 正治

原爆投下の心の内の広島、「空剥けてゆく」と表現されたのは脱帽。原爆雲が空をくるっと剥いて、その後の黒い雨を降らしたのだ。

彼是のしげりは全てズリ山と 柴田 郁子

炭鉱の賑はつてゐたあの時代の遺物。ズリ山、今は草木が茂りこんもりと只の山。昔は生活の土台のズリ山。郷愁を感じつつ、現在は、帰れない故郷。

海霧抜ける幼霊の歌父の歌 大河原 真青

海霧の底から、幼霊のかすかな歌がしのび音のように、それに合はせて暖かい父の歌。  
震災の十年を迎へる家族にとっては、海霧の咽び音は離れる筈はない。

逃げ水や 故郷遠く また遠く 浅田 正文

作者は金沢在中、故郷は福島。原爆事故のため福島を離れたのだらうか。その想いを、逃げ水とみたのは、どこまでいっても掴めない、故郷への想い。この様な人はどの位いらつしやるか。十年たつても、或いは五十年?